

泰田伊知朗：呉茂一先生の生涯（文中敬称略）

略年表¹

- 1897年 12月 20日 東京に生まれる
- 1905年 誠之小学校入学（7歳）
- 1910年 府立女子師範附属小学校（現、東京学芸大学附属竹早小学校）に転校（12歳）
- 1911年 府立第四中学校（現、東京都立戸山高等学校）入学（13歳）
- 1915年 第一高等学校医科入学（17歳）
- 1919年 東京帝国大学医学部入学（21歳）
- 1922年 東京帝国大学文学部に転学（24歳）
- 1925年 卒業後、東京帝国大学文学部言語学科副手（27歳）
- 1926年 ヨーロッパ留学（オックスフォード、ウィーン大学）（28歳）
- 1928年 帰国（30歳）
- 1929年 東京帝国大学文学部講師（31歳）
- 1932年 慢性腎臓炎療養のため教職を辞す（34歳）
- 1939年 日本大学予科教授（41歳）
- 1946年 第一高等学校講師、法政大学文学部講師（48歳）
- 1947年 第一高等学校教授（49歳）
- 1949年 東京大学教養学部教授（51歳）
- 1950年 日本西洋古典学会発足とともに初代会代表者に選出される（52歳）
- 1953年 東京大学大学院人文科学研究科西洋古典学課程主任（55歳）
- 1958年 東京大学を定年退職し、名古屋大学文学部教授に就任（60歳）
- 1959年 『イーリアス』の翻訳に対して読売文学賞を受ける（61歳）
- 1961年 名古屋大学を定年退職（63歳）
- 1963年 在ローマ日本文化会館の初代館長（65歳）
- 1966年 上野学園大学教授に就任、イタリアより帰国（68歳）
- 1968年 勲三等旭日中綬賞を受ける（70歳）
- 1973年 ギリシア政府よりフェニックス勲章を受ける（75歳）
- 『花冠一呉茂一訳詩集』に対して第十回日本翻訳文化賞を受ける
- 1977年 12月 28日 日本医科大学附属病院において永眠（80歳）

¹ この年表は、水谷（2003）を参考に作成した。

幼少期

呉茂一は、1897年12月20日に呉秀三の長男として東京の本郷²に生まれた。秀三は高名な精神科医であり、東京帝国大学精神科教授と東京府立松沢病院の院長も務め、医学史にも関心を持ちシーボルトや江戸時代の医師、華岡青洲に関する研究などを残している³。

呉という姓の由来は、広島藩浅野長訓の侍医であった茂一の祖父黄石が藩主の許しを得て、先祖ゆかりの呉浦（現在の呉市）の呉を取って呉黄石と名乗ったことに始まる⁴。祖父黄石および父秀三が医者であることからわかるように呉家はもともと医者の家柄であり、茂一の母方の祖父は津山藩の蘭学者で医師でもあった箕作阮甫、日本医科大学学長だった木村栄一は茂一の甥にあたる⁵。

茂一という名前は秀三の号からきている。秀三には芳溪と茂章などの号があり、前者の芳から茂一の妹の芳江を、後者を二分し茂一と弟の章二を名づけた⁶。

秀三は長男である茂一に医学の道に進ませるつもりだったので、小学校のころからドイツ語を学ばせた⁷。東京大学近くの誠之小学校に通っていたが⁸、後に小石川に引っ越し、ドイツ語の勉強は中止となる⁹。1911年、13歳で府立第四中学に入学し、本人の弁によるとごく平均的な生徒であったらしい¹⁰。

医学部から文学部へ

1915年に第一高等学校医科に進学し1919年には東京帝国大学医学部に入学したが、呉は一校時代から外国文学へ興味を持っており、やがて医師としての人生に漠然たる不安を持ち文科への転向を決意し、父からの許しを得て1922年24歳で文学部へ転科することとなった。後年、自身の転科についてこう語

² 呉（1954）：86頁。

³ 斉藤（1978）：19－20頁。

⁴ 田中（1996）：182頁。

⁵ 田中（1996）：178頁。

⁶ 呉章二（1978）：14頁

⁷ 呉（1970）：180頁。

⁸ 呉（1954）：86頁、水谷（2003）：571頁。1910年に誠之小学校から府立女子師範附属小学校に転校した。

⁹ 呉（1969）：46頁。

¹⁰ 呉（1970）：181頁。

っている：「やがて大学もおとなしく父の意向のまま医科に進んだが、そのころから私は自分の行く手について疑問と違和感を抱くようになった。つまり果して医術が天職として自分に適しているか、自分がほんとうによい医師になれるだろうか、(中略) またこれは大それた思い上がりでもあろうが、よくいって父や従兄同様に医学部教授ということで病院の廊下を巡回するか、と思うと自分の一生がもう見通せたような気持で味気がなかった。それならそうした安穩の生涯は一通り済ませたことにし、好き勝手な第二の生涯を試しても悪くはない」¹¹。

筆者が伺ったところ、後年呉は転科の理由について、息子の忠士には「血を見るのが嫌だった」、久保正彰には医者的大名行列が嫌で医者を辞めたと語ったそうだ。また呉を知る医師の野間祐輔と豊田秀三が言うには、呉は非常に繊細で、医者には不向きとのことだった。だが逆にその繊細さが文学や翻訳の分野では生かされ、翻訳賞の受賞¹²やベストセラーとなった『ギリシア神話』の出版へとつながったとも言えるだろう¹³。

転科を決意するに至るには様々な理由があっただろうが、その一つは白樺派の代表的人物である有島武郎との交際であろう¹⁴。医科に在籍していた当時より呉は有島の作品に感銘を受け、1920年に彼の家を訪れ交流が始まり、頻繁に有島家に通うようになる¹⁵。当時、有島から呉の進路変更に関して直接的な指導があったわけではないが、有島も心配して手紙などを送り案じていたそうだ¹⁶。

斉藤茂吉との交際

¹¹ 呉 (1970) : 184-5 頁。また他の記事では次のようにも言っている：「私の家は代々医者でして、父も東大の医学部の教授や、松沢病院の院長をしていましたから、私も自然東大の医学部へはいったんです。しかし、大学を出れば、父の跡をついで精神病の医者にならなければならない。私は神経が細いもんで、それに閉口して、文学部へ転科しちまいました」(『朝日新聞』、1963年4月11日、「人：ローマ日本文化会館館長になった 呉茂一」)。

¹² 1959年に『イーリアス』の翻訳に対して読売文学賞を、1973年に『花冠—呉茂一訳詩集』に対して第10回日本翻訳文学賞を受賞した。『花冠』に関して、篠田一士は朝日新聞(1971年5月28日)での書評で『海潮音』、『珊瑚集』、『月下の一群』、『車塵集』とともに近代日本の五大訳集の一つと数えられると評価した。野間(1979) : 21頁、田中(1993) : 297-301頁参照。

¹³ 呉・佐伯(1970) : 12頁によれば、呉の『ギリシア神話』は版を重ね1970年に全1冊で改定決定版が出版されたが、その旧版は上下巻合わせて売り上げが15万部にも達した。

¹⁴ 呉(1970) : 186頁。

¹⁵ 呉(1996) : 233-5頁。

¹⁶ 呉(1947) : 79頁。

またその他の文学者との交流、特に斉藤茂吉との交流は浅からぬものがある。茂一の父の秀三は斉藤茂吉の医学の師にあたることもあり¹⁷、茂吉は秀三に毎月『アララギ』を送っていたが、中学の頃から茂一はそれを読んでいた¹⁸。彼は大学時代に歌を作り茂吉と親交をもつようになり¹⁹、転科後に『アララギ』編集所に茂吉を訪ねて行き自分の和歌を見てもらうのだが、そこでの様子を呉は次のように述べている：「ともかくそこで私は全くの拙作をお目にかけて、これは何首かを紙に抜き書きしてのことと思うが、茂吉先生の批判を仰いだ、というより見ていただいた訳である。(中略)そして細かいことは言われなかったが、要約すると、お前の歌より、お前のおじいさんのほうがずっとうまい、ということであった。私の外祖父は三浦千春といって、桂園派に属し、『荻園歌集』というのを、おそらく没後、世に問うていた。高崎正風、八田知紀、山県有朋などと相知っていたが、そうたいした歌人ではないらしく見え、あまりよく読んだことがなかった。それを不意に持ち出されたので、私はきっと度肝をぬかれただろう。もちろん私は自信をもつほどの作者でもなく、氏の言い方も極めて磊落で好意的なもので、ちょっとからかわれたように見える。しかし私が自信をなくしたことは確かで、以後和歌をほとんど全く作らなくなった」²⁰。

それでも親交は途絶えることなく、茂吉は茂一が訳したギリシア・ラテンの詩を見て激励し、また後に茂一が腎炎をわずらい療養していたときも慰めの言葉をかけていた²¹。また茂吉の長男は精神科医の斉藤茂太であるが、もともと茂吉は茂太に「茂一」と名付けようとしたというエピソードもある。だが茂吉の恩師にあたる呉秀三の長男と同じ名前をつけるのもおかしいので、それを茂吉は引込めた。その後、茂太に長男が生まれ、その子が茂一と名づけられることになる²²。その他にも茂吉の次男で作家の北杜夫が大学生のときラテン語を勉強するというので、呉は自著の『ラテン語入門』を進呈している²³。

文学部時代

¹⁷ 斉藤 (1978) : 19 頁。また呉秀三は茂吉の仲人でもある。田中 (1993) : 105 頁参照。

¹⁸ 呉 (1976) : 192 頁。

¹⁹ 田中 (1993) : 326-7 頁。

²⁰ 呉 (1976) : 197-8 頁。

²¹ 呉 (1970) : 182 頁、呉 (1976) : 193-4 頁。

²² 斉藤 (1978) : 20 頁。

²³ 田中 (1993) : 101 頁。

転科した際まだ東大文学部には西洋古典学科はなかったため、英文科に在籍した。とくに西洋古典を専攻した理由について、呉曰く、「私としては西洋古典といっても、特にどの作家をとというより、むしろその文化的特質とか時代思潮とかに関心があった。(中略) それにおこがましい考えながら、幕末以来私の一家一門は蘭学から洋学に携わって来たので、同じくわが国にかほどの変革をもたらした西洋文明の本源について、特質なり推移なりを多少ともわきまえたい気もあった」²⁴。

転科した後、呉にとって大きな事件が立て続けにおこる。有島と、日本に西洋古典学の種を蒔いたと言われるケーベル博士の死である。呉は英文科に転科後、英文学や言語学、インド文学などの講義を聴講していたが²⁵、あまり講義がないこともあり有島家を頻繁に訪れていた。そんなとき1923年6月7日前後、有島武郎の弟、有島生馬からケーベル博士が重態であることを知らされる。当時、博士は東大の職を退き、天涯孤独で弟子の久保勉だけを伴い、横浜のロシア領事館の2階に住んでいたのだ。そこで病を患っていたので、呉は久保の手伝いに向かう。茂一はそのときの心情を記している：「固より「作品集」や「思想」への寄稿で博士の高風は疾くから承つて居り、殊に如何にもギリシア的なその人柄や、奥行のある往古の賢人を偲ばせるやうな言行に深い敬慕の念を寄せてみた自分にとって、何の否應もなかつた。とりわけて多分に殉情的であつた其頃の自分には、斯く迄も優れかつ尊敬に價する人がいま病床にありいはば助力を求めてをられるに際して、自分が些かたりとも微力を盡しこれに赴き得るのは、本望であり名譽であるとさへ考へられた」²⁶。

こうして呉は博士の看病に向かうが、4、5日看病したところで、6月11日に有島武郎の失踪事件の報を内々に聞く。そして、有島の子供たちのもとへ駆けつけるか、このまま博士の看病を続けるべきか悩んだ結果、看病は人に頼んで有島家へ駆けつける。だがすでに有島武郎は6月8日前後には軽井沢の別荘で恋人の波多野秋子と心中を遂げており、14日にはケーベル博士も死去した²⁷。

呉が大学生のときの英文科の教授にはケーベルの弟子である市河三喜がいた。日本の英語学の礎を築いた市河はラテン語とギリシア語の文法書も著して

²⁴ 呉 (1970) : 188-9 頁。

²⁵ 呉 (1970) : 189 頁。

²⁶ 呉 (1947) : 63 頁

²⁷ 有島とケーベルの死に関しては、詳しくは呉 (1947) : 61-9 頁 (「ケーベル博士の思ひ出」) を参照。

いるが²⁸、呉はこの本の書評を書いている²⁹。その他お雇い外国人として招聘されていたのが、英国詩人のロバート・ニコルスであった。このニコルスと茂一は馬が合ったのだろうか、次のエッセイから親しく交流していた様子が伺える：「この勤勉でない學生の私は、であるからあまりニコルス氏の講義にも満足に出席はしてゐなかつた。(中略)かふいう譯で教室において警咳に接する機の尠なかつた私は、本當ならニコルス氏と親近するわけがない筈であつたが、どういふわけか時をり芝山門外の氏の住宅を訪ねてゐる自身を見出すやうになつた。(中略)それにこれはたしかニコルス氏の最後の試験の際であらう。

「無情な美人を月にたとへて、」及び「初めて西洋料理を食つた折の經驗」を二行詩に作れ、といふ大學としては珍しい課題が出された。まともな問題には手を擦りがちなくせにいたづら好きな私は大いに喜んで何とか辻褄を合はせ、面喰つた胃の腑をはじめて外出して當惑した姫君にたとへたりして、その責を塞いだものだつたが…」³⁰。

大学卒業後の就職と留学

1925年大学卒業後、言語学科副手を勤めながら法政大学予科でも教鞭をとるが、ここで田中美知太郎と交流を持ち³¹、その後2人の交流は未永く続いた。呉と田中は鉄塔書院から出版された『ギリシア・ラテン講座』で共著し、後に共に西洋古典学会を立ち上げた。そして最後に田中は呉の葬儀で弔辞を読んだのだった³²。

1926年から西洋古典学を学ぶためにヨーロッパに留学して、オックスフォードとウィーン大学で学び、そこでホメロス学者のトーマス・アレンやギルバート・マレー³³、そのほかにもイギリスの高名な詩人ジョン・メイスフィールドとも交流した。実はメイスフィールドを呉に紹介したのは、先のロバート・ニコルスである³⁴。呉は外遊中に多くの洋書を手に入れ、その中にはホメロスの最も重要な写本と言われる *Venetus A* の複製本も含まれている³⁵。

2年余りの留学だったが順調ばかりとはいかず、途中で腎臓を痛めたためイ

²⁸ 市河三喜、『ラテン・ギリシヤ語初歩：英學生の爲め』、東京、研究社、1930年。

²⁹ この書評は、『英文學研究』、10巻、2号、312-4頁にある。

³⁰ 呉(1947)：11-5頁。

³¹ 呉(1970)：189頁。

³² 田中(1978)：176頁。

³³ 呉(1970)：190頁。

³⁴ 呉(1947)：18頁。

³⁵ 呉(1969)：47頁。

ギリスでの療養を余儀なくされる³⁶。その他にも留学生生活を次のように回想している。「しかし一方オクスフォードでの自分はかなり孤獨であつた。(中略)それにも拘わらず異郷はついに異郷であり、自分はつひに Wanderer たるを免れなかつた。(中略)湖畔地にもスコットランドにもとうとう行かずしまひに終わった私である。夏目漱石でさへ訪ねたらしい倫敦塔も見ずしまひであつた。バスチーユなど無論ゆかない。これは少しひどいので滅多に口外しないが、實はベルリンにも行かなかつた。歸りには臆劫もあつてアメリカも行かずしまひになつた。全く自分は頑固でひとりよがりだつたものと、今更に呆れる次第である」³⁷。

帰国後 1929 年より東大文学部で古典語の講師を務める。東大では田中秀央が京都大学へ去ってから、古典語担当者の招聘に苦慮しており³⁸、呉は母校に迎えられることになる。東大ではギリシャ語、ラテン語の文法および講読の授業を担当していた。文法の教科書は英語で書かれたものを使っていたが³⁹、その後 1931 年から 32 年にかけて、鉄塔書院より『ラテン文法概要』を出版する⁴⁰。講読では『イリアス』、ヘロドトス、ホラティウスの『詩論』、『アエネーイス』、などを読む⁴¹。この授業に参加していたのは 4、5 人だったが、その中には後に日本の西洋古典学を支えることになる高津春繁や村川堅太郎がいた⁴²。だが腎炎再発のため、1932 年に教職を辞す⁴³。

療養生活

職を辞す直前にはすでに体調が相当悪く、当時講義を受けていた野上が述べるには、休講もしばしばで、講義があるときもまず運転手が教壇のいすに毛布をしき、それから呉がステッキをつきながら入ってくる。講義は流れるような調子で進んだが、終わるとさっと退出するという具合であつて、退職後は田中秀央や神田盾夫が代わりに講義を勤めた⁴⁴。

³⁶ 呉 (1970) : 190 頁。

³⁷ 呉 (1947) : 18-20 頁。

³⁸ 大阪言語研究会のホームページより。http://www.let.osaka-u.ac.jp/~kamiyama/Kure.html

³⁹ 水谷 (2003) : 572 頁によれば、Ball の *Elements of Greek* や Collar-Daniels の *First Year Latin* が使われていた。

⁴⁰ 水谷 (2003) : 572 頁。

⁴¹ 水谷 (2003) : 572 頁、村川 (1993) : 286 頁。

⁴² 村川 (1993) : 285-6 頁。

⁴³ 呉 (1970) : 190-1 頁。

⁴⁴ 野上 (1981) : 114 頁。

7年間、腎結核の治療のため休養し、その間に腎臓をひとつ摘出している。この闘病期間について、呉は以下のように述べる。「私の理想主義？もおそらく七年余の実績を有する病臥のせいなのかもしれない。そしてこの七年間が恐らく私と実世間との間にこのようにも超えがたい障壁を作り出したのだろう。全くこの病気というものが私に与えた影響はけだし甚大で私の疲れやすさや頑固さ怒りっぽさ座りたがる癖（体の重心がずり落ちたらしい）暑がり（皮膚が薄くなつて）等々あらゆる欠陥はこれに起因している。又私はそれ以来務めて無理をせぬよう遠慮をしすぎないようにしている。非力さの認識は無理をしてもだめだということ教えてくれた、遠慮とて同然それは何のプラスにもならない、むしろ反対にしてもらうのがしかるべき場合はしてもらう方がいい、それは無理の基だからである。しかし理想主義の私はなかなかこう割り切れず時々ずい分困惑する」⁴⁵。

ここで紹介されている呉の性格について、実例をあげて紹介しよう。

頑固さ、怒りっぽさ...村川堅太郎の回想によれば、東大で行われたギリシア語の最初の授業で、哲学科の学生の一人が最初の日には哲学の古典を読むように願い出た。呉はどうした理由か断固として拒絶し、そしてその授業中のことである。「先生は、その日の授業の中でこの不遜の提案をした学生に、何だったか忘れたが、ギリシア語の質問をされ、この学生のヒュブリスにみごとな鉄槌を下されたのであった。物静かで上品な先生が案外にこわい、そしてはっきり言えば意地の悪い先生だと感じた」⁴⁶。

暑がり...野間祐輔宛に出された手紙が出版されているが、その中に頻繁に登場する語が「冷房」である。一例を紹介する。「なお、呉市での歓迎会は（中略）また暑いでせうから、なるべく冷房のあるところが落ち着いて交歓できると存じますので、御馳走よりその方を主にお願したく存じます。ホテル・レストランも近頃は大分冷房が普及しましたから、多分呉市でも若干は涼しいところがあるかと存じますが如何でせう。よろしく勘察願ひ上げます」⁴⁷。「当地も九月になりまして朝夕ずつと凌ぎ易く、夜は廿五、六度になります（日中は三十二度にも）。たゞ湿気が多いので、時々クーラーをつけて湿りを取ります。クーラーもあまり強くしなければ夏場は大変助かります。呉市のように蒸し暑いところでは不可欠でせう、スプリット型というのが、（小型で八畳ぐらい和室

⁴⁵ 呉（1951）：1頁。

⁴⁶ 村川（1993）：286頁。

⁴⁷ 田中（1996）：10頁。

十分です) 便利でおすゝめいたします」⁴⁸。

その他、呉の手紙やエッセイを読んでみるとユーモアに満ちた文章を見ることがある。一例をあげよう。東大在学時の授業中にニコルス氏が机の上に腰かけて、ほかの詩人の作品を吟唱している場面を思い出し、次のように述べる：「後年私もさる學校で教鞭を託されたをり、氏に倣つて机に腰かけ、一つキーツかコルリッチでも朗々と歌ひ上げて見ようかと窃かに意つた。といふのは一つにはその學校の教室に、教師用の椅子がなかつたからでもある。しかし不幸にして私のこの優にやさしい願望も、つひに成就の期を得られなかつた。昔から扁桃腺を害して、たえず慢性咽喉カタルに悩んでゐた私はその器でなかつたうへ、机といふのがまたまことに不安定で、そこに生徒が坐つてゐないと、忽ちにして轉覆する性癖をもつてゐたので。ところで學生といふものは、力學の法則により絶えず教師から最大限の距離を保ちたがるものである」⁴⁹。

息子の忠士の話でも呉は多少頑固だったところがあったようで、呉は酒もタバコもやらなかった。基本的には人が来てもあまりかまわなかったが、例外は一高時代の同級生の杉基一で⁵⁰、杉が来たら酒を出してふるまい、将棋を楽しんだそうだ。

大学に復帰

病も回復に向かい、1939年には教壇に立てるようになり、戦後は東大(駒場)で当時学部長を勤めていた矢内原忠雄や、ギリシア語教員の前田護郎らとともに西洋古典学研究室の設立に努める⁵¹。1948年11月7日には日本西洋古典学会創立の打ち合わせ会が京都で開かれ、そこには呉を始め、田中美知太郎、高田三郎、泉井久之助、野上素一、松平千秋などそうそうたる顔触れが集まった。1950年に京都大学文学部において日本西洋古典学会の設立大会が開催さ

⁴⁸ 田中(1996):23頁。

⁴⁹ 呉(1947):12頁。

⁵⁰ 呉(1970):184頁。

⁵¹ より詳しくは、呉(1958):2頁、前田(1958):2頁、呉(1970):194頁、水谷(2003):573-8頁などを参照。呉はまず1939年日大予科で英語を教え、終戦後46年一校で英語とラテン語の教授となる(朱牟田[1978]:18頁によれば、一高は1946年の新学年にあたって戦時中の2年制からもとの3年制に戻り、各科に大幅な欠員を補充し、その中に呉が含まれていた)。そして一校が東大教養部に変つたのち、呉は西洋古典研究室の設立に尽力する。1951年に駒場に古典研究室が設立され、その秋には大学院準備委員会が学部長室で開かれ、1953年春に新制東大大学院が発足すると同時に駒場の西洋古典学研究室も正式に動き出す。同年、西洋古典学課程主任に就任した。

れ⁵²、学会発足とともに初代会長に就任する⁵³。

晩年呉は、当時の日本の西洋古典学のことを振り返り、未来への展望を交えながら次のように語っている：「ところで西洋古典学課程の開設について、私は改めて自他に反省を加えねばならなかった。学問の対象として西洋古典古代はわれわれにどんな意義を持ちえるか、その真実の追及は可能だろうか、われわれには有効な資料も文献さえ全く欠如してるといっていい。欧米のような基礎的な文献学研究も求めようがない。だからといって日本と欧米とでは学的な水準が全く異なるなど卑下する要は一向ないであろう。世界文化の成立と現代の要請下における日本の西洋古典研究の当為は、正しく欧米のそれとは異るところがあるべきだった。(中略) 当時西洋古典学はまだ準備期を脱せず、一般に知識も乏しく研究者も貧しかった。人文科学委員会の問いに答え、古典知識の普及を急務としたのはその意味合いからだった。しかし情勢はかなりに改善され、真摯な学徒も数を増した、本学界も明るさを加え、日ならずして委細の課題研究が遊離した独善に陥らずに、日本文化総体の精神栄養として広く認められる秋も来ることであろう」⁵⁴。

ローマに赴任

東大を退官後、名古屋大学に移り、1963年4月からはローマの日本文化会館の初代館長を務める。これは野上素一の推薦によるもので、呉は当初断ったのだが吉田茂首相からも頼まれ、3年の任期でローマに赴任することになった⁵⁵。引き受けるにあたっての心情を次のように述べている：「こんどのお仕事は昨年お話があった時は、かなり迷いました。まあイタリアはラテン文化の本拠ですから、私の勉強にも役立つと思うんですが……」⁵⁶、「日本文化を紹介する仕事は、元来、抽象的ですから、期待されても困るんですよ。さしあたって、オリンピックもあることだし、日本へ大勢来ていただくように宣伝しましょう。ただ、仕事は学問的にすすめたい。蔵書をふやしたり、イタリアに関する資料を集めて、ローマに来られる学者の方々の便宜を図ったり……、最初はそんなことから、と考えています」⁵⁷。

⁵² 中務 (2007) : 239 頁。

⁵³ 水谷 (2003) : 577 頁。

⁵⁴ 呉 (1970) : 194-6 頁。

⁵⁵ 田中 (1993) : 110、165 頁。他にも野上 (1981) : 114 頁を参照。

⁵⁶ 『朝日新聞』、1963年4月11日、「人：ローマ日本文化会館館長になった 呉茂一」。

⁵⁷ 『週刊文春』、1963年4月22日号、「ローマへ赴任した学者公使—在ローマ日本館館長の呉

館長時代に *Annuario / Istituto giapponese di cultura in Roma* という雑誌を創設した。これは、在ローマ日本文化会館発行で邦人によるイタリア研究に関する雑誌である⁵⁸。久保正彰は、この雑誌によって日本のラテン研究がイタリアでも知られることになったと言う⁵⁹。また呉は、日本における西洋古典学研究を西洋諸国に対して宣伝することに関しても先駆者であり、すでに 1956 年に次のような論文がある : Shigeichi Kure, “Les Études Latines dans le Monde: I. au Japon”, *Revue des Etudes Latines* 33 (1956), pp. 100-103. この中で呉は、ケーベル以降の日本の西洋古典学に関する研究、教育、出版状況などを概観している。欧語で書かれたこうした解説は今では数多くみられるが⁶⁰、当時としては貴重だった。

晩年

帰国後は上野学園大学教授となり、ヨーロッパ古典語、および歴史学を担当する⁶¹。上野学園大学は音大であるが、呉のピアノの腕前はなかなかのものだったようだ。渡邊の報告によると、呉はピアノに堪能で時々弾いては周囲のものを驚かせた⁶²。またいくつかの学校の校歌や社歌の作詞をしているが⁶³、作曲を担当したのは親戚の作曲家箕作秋吉で、呉が辻堂、箕作が茅ヶ崎と家が近く親交が深かった。さらに呉の妻トミヨも上野学園大学の音楽の教師である。

だが 1974 年トミヨ夫人が死去する。夫婦仲がよく、その死は呉を深く悲し

茂一氏一」、18 頁。

⁵⁸ 水谷 (2003) : 586 頁。

⁵⁹ 久保 (1978) : 175 頁。

⁶⁰ E.g. Chiaki Matsudaira, “Classical studies in Japan”, *Romantias* 4 (1962), pp. 313-7. / Shigeru Kawada, “Review Discussion: Classics in Japan”, *JHS* 108 (1988), pp. 212-5. / Masaaki Kubo, “Japan: Greek and Latin Philology”, *La Filologia greca e latina nel secolo XX : atti del congresso internazionale, Roma, Consiglio nazionale delle ricerche, 17-21 settembre 1984*, vol. II, 1989, pp. 669-84. / Kozue Kobayashi, “L’érudition de l’antiquité classique au Japon”, *Philologus* 136 (1992), pp. 297-305. / Hiroshi Notsu, “Etudes Gréco Latines au Japon”, *TÔZAI* 1 (1996), pp. 99-126. / Shigetake Yaginuma, “A Brief History of Classical Studies in Japan”, *Kleos* 2 (1997), pp. 311-8. / Akihiko Watanabe, “Classica Japonica: Greece and Rome in the Japanese Academia and Popular Literature,” *Amphora* 7 (2008), pp. 6, 10-11.

⁶¹ 水谷 (2003) : 587 頁。上野学園大学では一般教養の教授、および図書館長として働いた。この就職に関しては、上野学園の学長石橋益恵が茂一の妻とみよの府立第一高女（現、東京都立白鷗高等学校）からのピアノの師だったという縁もある。詳しくは石橋 (1978) : 19 頁を参照。

⁶² 渡邊 (2009)。河底 (1978) : 6 頁では、呉のピアノ演奏会の様子が描かれている。

⁶³ 呉は例えば辻堂の市立明治中学校、青森工業高校、東奥学園高校の校歌、および旭硝子の社歌を作詞している。呉と親交があった渡邊兼敏が青森の高校で教えていたこと、明治中学は呉の住んでいた辻堂にあること、旭硝子の重役が辻堂に住んでいたこと、こうした縁から呉が作詞することになったのだろう。

ませた⁶⁴。夫人をなくしてから、特に元気を失ったようである。医師である野間宛ての書簡にこう記している：「病院に入つてグズグズ言つていたくないので、むしろ安楽死を願いたく、そのうちお宅に適当なクスリをそつと譲つてくださるようお願いに出るかも知れません」⁶⁵。

呉が亡くなった際の担当医は、日本医科大学に勤めていた甥の木村栄一である。その報告によれば、まず 1976 年 6 月に脳卒中の発作が起こり、意識不明に陥った。幸い回復し、起き上がれるようになったが内臓に異常が見つかり手術する。術後退院し、上野学園大学にも出勤できるほど回復した。しかし 1977 年 5 月肝臓の障害で再入院し、胆道に癌が見つかる。手術は無理だったが、治療の甲斐あり回復に向かう。だが 12 月 26 日に突然症状が悪化し、12 月 28 日夜 10 時 52 分心肺停止が確認された⁶⁶。

葬礼およびその後

呉は亡くなる前にはカトリックの洗礼を受けており、洗礼名はヨゼフといった⁶⁷。葬儀および告別式は翌 1978 年 1 月 7 日に東京カテドラル聖マリア大聖堂で村川堅太郎を葬儀委員長として執り行われ⁶⁸、弔辞を述べたのは西洋古典学関係者の中では、田中美知太郎、松平千秋、久保正彰など歴代の西洋古典学会会長が務めた⁶⁹。呉の墓は、東京の多磨霊園にある。

亡くなった後、息子の忠士の頭を悩ませたのが呉の膨大な書物だった⁷⁰。結局忠士は、久保正彰に頼んで西洋古典学関係の本を持っていってもらい、これらの蔵書は現在も東京大学の西洋古典学研究室に呉文庫⁷¹として収められている。それ以外の本は文芸評論家、中村光夫の紹介で鎌倉図書館に寄贈した。

後に田中隆尚が呉のことを書いた出版物を忠士に送り、それを忠士が広島野間祐輔に送った。すると野間が自身のところにも茂一からもらった手紙がた

⁶⁴ 石橋 (1978) : 19 頁によれば、夫人の葬式の際に上野学園大学学長から慰めの言葉をかけられた呉は、「それまで常にかかわらずにこやかにしておられた先生が、突然ハンカチを出してむせび泣かれたのでした」。

⁶⁵ 田中 (1996) : 153 頁。

⁶⁶ 木村 (1978) : 94-5 頁。

⁶⁷ 津田 (1978) : 35 頁。

⁶⁸ 水谷 (2003) : 593 頁。

⁶⁹ 村川 (1978) : 92 頁。

⁷⁰ 呉は生前に蔵書の一部を親しい人に与えていた。1975 年 1 月 14 日に六本木で開かれた呉の喜寿を祝う会では、福引をして約 30 人の出席者に本を配った。この会については河底 (1978) : 9 頁、田中 (1993) : 323-4 頁参照。

⁷¹ 約 2000 冊。日本の大学所蔵特殊コレクションのホームページより。

http://tksosa.dijtokyo.org/?page=collection_detail.php&p_id=354&lang=ja

くさんあるので出版しようということになった。それが縁で「呉先生を偲ぶ会」が開かれるようになり、今も毎年、呉を慕う人々が集っている。幸いなことに筆者も2011年9月に第16回「呉先生を偲ぶ会」に参加する機会を得、そこで呉が東大に勤務していたときの話や、蘭学と呉家のつながりなど様々な貴重な話を伺うことができた。

呉自身を知るための出版物としては、まず呉の自伝を参照されたい：呉（1970）。水谷（2003）では、呉の生涯と業績が年表で詳しく紹介されている。また呉が田中隆尚と野間祐輔にあてた手紙が出版されている：田中（1993）、田中（1996）。野間は茂一について論じた論文（野間[1979]）の他に、『呉家のひとびと』という著書で江戸時代中期から茂一までの呉一族について紹介している。また呉が亡くなってから『ももんが』および『饗宴』という雑誌が追悼号を出版しており、そこには呉を悼む数多くの人々からの寄稿文が集まっている。

謝辞

本論文を作成するにあたって、久保正彰様、野間祐輔様、呉忠士様、呉美佳子様、豊田秀三様、葛西康德様には貴重なお時間を割いていただき、インタビューに応じていただきました。心よりお礼申し上げます。もし内容に疑問および不備などございましたら、ぜひ筆者までご連絡ください（ictmh111[at]yahoo.co.jp）⁷²。

参考文献表

石橋裕（1978）、「弔辞」、『ももんが』、22巻、12号（呉茂一先生追悼特編）、18-9頁。

河底尚吾（1978）、「映像の中から」、『ももんが』、22巻、12号（呉茂一先生追悼特編）、4-11頁。

木村栄一（1978）、「症状経過」、『饗宴：呉茂一先生追悼号』、林檎屋、94-5頁。

⁷² 文中での引用のさい、旧字体に関してはできるだけ原文のまま引用するよう心掛けたが、フォントの関係で新字体になっているものもある。

- 久保正彰 (1978)、「呉茂一先生の逝去を悼む」、『西洋古典学研究』、26号、175頁。
- 呉章二 (1978)、「兄」、『ももんが』、22巻、12号 (呉茂一先生追悼特編)、14-5頁。
- 呉茂一(1947)、『花とふくろう』、要書房。
- 呉茂一 (1951)、「私の主義」、『教養学部報 (東京大学教養部)』、3号、1頁。
- 呉茂一 (1954)、「踊るパアン像」、『小さな自画像—“わが幼き日”101人集— (朝日文化手帖)』、朝日新聞社、86-7頁。
- 呉茂一 (1958)、「“A Deju,,」、『教養学部報 (東京大学教養部)』、66号、2頁。
- 呉茂一(1969)、「洋書の古典」、『學鐙』、1月号、46-7頁。
- 呉茂一(1970)、「西洋古典学：呉茂一」、『わが道 II』、朝日新聞社、177-200頁 (自叙伝。1969年8月に朝日新聞で連載されたものの再録)。
- 呉茂一(1976)、『アクロポリスの丘に立って—ギリシア文学閑話—』、新潮社。
- 呉茂一(1996)、「思い出のまゝに」、『《有島武郎研究叢書》第十集 有島武郎と場所』、右文書院、233-5頁 (1930年の原稿の再録)。
- 呉茂一・佐伯彰一、「ギリシア神話—人間の生き方の原型—」、『海』、2巻、1/2月号、1970年、12-7頁
- 斉藤茂太(1978)、「呉茂一先生」、『饗宴：呉茂一先生追悼号』、林檎屋、19-21頁。
- 朱牟田夏雄 (1978)、「弔辞」、『ももんが』、22巻、12号 (呉茂一先生追悼特編)、18頁。
- 田中隆尚(1993)、『呉茂一先生』、小澤書店。
- 田中隆尚編(1996)、『呉茂一先生の手紙：野間祐輔宛書簡集』、小澤書店。
- 田中美知太郎 (1978)、「弔辞」、『西洋古典学研究』、26号、176頁。
- 津田季穂 (1978)、「呉先生と私との縁」、『饗宴：呉茂一先生追悼号』、林檎屋、33-35頁。
- 中務哲郎 (2007)、「松平千秋先生の逝去を悼む」、『西洋古典学研究』、55号、239-40頁。
- 野上素一 (1981)、「呉茂一先生のことなど」、『ももんが』、1981年12月号、114頁。
- 野間祐輔(1979)、「先祖の地を懐しみ、こよなく愛された呉茂一先生を偲んで」、『餘韻』、41号、14-37頁。

前田護郎 (1958)、「呉先生のことー研究室で若き友に語るー」、『教養学部報 (東京大学教養部)』、66 号、2 頁。

水谷智洋編 (2003)、「呉茂一年譜」、呉茂一 (訳)『イーリアス』(下)、平凡社、571-93 頁。

村川堅太郎 (1978)、「呉先生葬送の記」、『饗宴：呉茂一先生追悼号』、林檎屋、89-93 頁。

村川堅太郎(1993)、『古典古代游記』、岩波書店。

渡邊兼敏 (2009)、「青森近代文学館、平成 21 年度調査員報告」

<http://www.plib.pref.aomori.lg.jp/top/museum/kuresigeiti.html>

泰田伊知朗 (台湾、義守大學)